

◆天候不順についての文章が目立った。東京の河村さんと丸山さん、福島の池田さんの短歌作品にも見られる。四季のある日本では、天気具合が作物にも人間の心身にも大きく影響するわけだから当然かもしれない。当方は山形に引越してきて五度目の夏だった。十代まで住んでいた土地といっても、天気傾向までは覚えていない。だから毎年、新鮮に夏を迎える。蔵王連峰や月山を仰ぎ、地元サッカーチームの試合を予想し、ことしはどんな夏野菜に出合うかと思ったりする。東京と違うのは、梅雨のじめじめ感がないこと、夏が少しだけ短いことだ。

山形はそこそ暑かったが、宮城県や岩手県では「やませ（山背）」のような風が吹き、寒い夏だったようだ。米の出来はどうなのだろうと気にかかる。宮澤賢治の「雨ニモマケズ」の一節「サムサノナツハオロオロアルキ」を思い出す夏だった。

◆四十年ほど前、スーパーマーケットの敷地内のテナントとして「書物屋ほんべえ」は開店した。狭い店だったが、社長・飯野一昭さんの情熱と人柄に惹かれて多くの人が立ち寄ってくれた。一年間、働かせてもらったから、私にとっても思い出深い店だった。作家・井上ひさしとの交流もあったと聞く。その後の興隆を経て、今回の閉店となった。老舗だった二軒の本屋はすでになく、これで河北町には本屋がなくなってしまった。

◆七月二日、「展景」の主宰者だった布宮みつこ（山内美津子）の十三回忌がいとなまれた。縁あって、

東京高輪たかなわの泉岳寺に叔母の墓はある。久しぶりに泉岳寺に行ったら、外国人の観光客が多かった。それにも増して驚いたのは、本堂でお経を上げてもらうとき、若いお坊さんの一人が外国人だったことだ。詳しいことはきかなかったが、曹洞宗の本山・永平寺で修行をしてきた僧にちがいない。真摯に仏教に取り組んでいる姿に尊敬の念を抱いた。

赤穂義士以外の墓所には、一般の人は入れない。叔父と叔母の眠るお墓のあたりは静かだった。お墓に水をかけて線香を点しているとき、黄揚羽と黒揚羽がかわるがわるやって来た。誰かが言った。いつもここに来ると蝶々が飛んでくる、と。叔母のにこっと笑う顔が思い出された。

（布宮慈子）

muninokai.com

上記のサイトでは、フルカラーのオンライン版「展景」を公開しています。

季刊 展景 87号

二〇一七年九月二十日 発行

編集・発行人 布宮慈子

制作 スタジオ・マージン

無二の会「展景」発行所

山形市上町二一―一七―二〇二

info@muninokai.com

Copyright © 2017 MUNINOKAI. All rights reserved.